2024年11月

課題本 『トモスイ』

高樹のぶ子/著　　新潮社　　２０１１年

◆◆◆11月の読書会から

先月の感想文を読んで、参加者が感じたことを共有することから始まりました。本に書かれていることに疑問をもった人が多かったようです。感想文を読んでひと月の間に考えてまたみんなで振り返る、それによって自分を更新する、このことの大切さを改めて感じました。

今月の課題本は高樹のぶ子の短編集『トモスイ』。表題作の「トモスイ」は川端康成文学賞を受賞しています。アジアをめぐる10篇の短編の感想は、参加者の数だけ広がります。ひとり読書では気づかなかった作品の魅力が語られ、今月も有意義な読書会となりました。

（文責：森下）

2024 年竹原読書会 11 月『トモスイ』(高樹のぶ子　作)

吉川五百枝

短編ばかりとは言っても 10 の物語を並べて、読むのに時間をかけると、最後にたどり着いたときには、2 番目以降はどこの国の何の話だったっけ？となっています。

「インド酔い」という言葉が文中に出てきます。

インドは、何回か行ったので、あの方向感覚がはっきりせず、善悪も混沌とし、大気も濁って輪郭が消し飛んでしまう酔いの気分ではありますが、乗り物酔いとは違って、おいしいお酒を飲んだような恍惚感もしっかりあるとわかります。

同様に、「東南アジア酔い」もあると言いたくなります。東南アジアも何カ国かを旅しました。作者の「東南アジア酔い」を感じるのは、太陽の光の強さ、何種類もの自己主張する刺激的な匂い、植物の強烈な生命力、人と生きものが混じりあう喧しい風景、それらの中にある忘我の酔いを思いだしたからです。周囲の迫力に気圧されしている自分がいるのでしょう。

著者の自認として言うように〈外からの刺激を受けて書きたいものが生まれる〉タイプなら、〈アンテナや鏡という固有の受感装置は簡単に崩れ、溶けることもある〉と書くのも想像できます。

むき出しになった皮膚感覚、鼻を驚かせる匂い、触れた時の手の感触、遠慮ない眼差し、それらを感じただろう著者の〈カタチを失ったクラゲのように頼りなく、五感に浸りすぎて何やらあやうい〉あの地に滞在した体験としてそのままの感覚が乗り移る文字群なのです。

私も、東南アジアから、日本に帰ってきて最初に感じるのは、日本の匂いの弱さでした。逆に、彼の地に行って、飛行機の外に出た途端に襲ってくる匂いの強烈なこと。これは、自分がナマミの肉体を持つ事を先ず知らしめる最初のカルチャーショックなのでした。

この本に最初にであったのは 13 年前のことです。

その時のメモが残って居ました。私はこう考えていたのです。

【「本」を読むときは、自分の胸の内に住む住人を増やしたいという気持を持つ。知らない場所、知らない人、知らない文化。知らない事を知り、人が暮らす事の中には、こんなにいっぱいのことを含んでいたのだと納得させられて過ごしてきた。それは、常に「自分」が中心にいて、情報をかき寄せている。

しかし、『トモスイ』は、その自分自身が「遊離体験」をする。

小説は、もともと「遊離体験」が持ち味なのかもしれないが、いつ、どこで、だれが、という基本的な部分は、早い内に明かされ、それによって虚の世界でも一応の筋が安定する。だが『トモスイ』は、「どんな？」と言う問答が成立しない。短編小説であるということは、辻褄の合う説明を求めないうちに終わることもある。〈わたし〉が主人公だが、どこかの海に、ユヒラという名前の人と底が透明な平たい舟で夜釣りにでかけるのだ。「ユヒラさんてどんなひと？」「トモスイ」という生きものをつり上げるのだが、「それって なに？」の答えは準備されていない。とりあえず、手ぶらで乗り込むしかない。】

今回、課題図書になったので、また読み直すことになりました。20頁ほどの作品だから、何回か読み重ねる事ができましたが、何回読んでも、文中から知り得る情報が増えそうにありません。

花芽港が、タイのどこかだというのは「あとがき」で解りますが、タイの広い河口の近海で釣れた魚に、直接、口をつける気にはなれません。濁って生活の垢が近海を汚しているのです。しかし、夜釣りという設定が良い。月光以外の灯りがなければ、海面はきれいなものだし透明度も高い海が想像できます。これなら安心して読み進められます。

この作者は「恋愛」を書かせたら最高の作者だとずっと思ってきました。今でもその感は変わりません。だが、『トモスイ』を読むと、作者の「恋愛観」という文字を、呼吸できない深海に一度しっかり深く沈めなければならないと思いました。

高樹さんは、「恋愛」という世の通念で語られる中の最後の一点そのものを書いて居るのだ、と思います。二つの存在が、二人だけの一つの世界になり、その最後の呼吸は一つながら、宇宙そのものに遊離して正体を無くす。

男とか女とかというのは、「正体を無くす」存在に詰めていくための“道具建て”だったのでないか。異性愛とか同性愛とかはどうでも良いことで、「自由な遊離する存在」を現すための手段だった。それによって、しきたりや秩序だと思い込んでいる性別にとらわれる日常から離れる。だから、小説が持つ自由さを利用して、セックスチェックのような思考を中断し、自分が愛”（と思っている）の芯を覗いてみることへのおさそいが『トモスイ』なのではないか。

舞台が、あまりにも想定外なので、領域が違って見えますが、私には、やはり作者が、自分の求める「自由」に忠実だなと思えたのです。

〈わたし〉も〈ユヒラさん〉も、男性か女性かを指定していません。持ち物や家族関係が少しは書かれていますが、これも多様性の社会を生きていれば、固定しきれないのです。つり上げた「トモスイ」にいたっては、通常で言う「両性具有」の魚と断定できない不思議な生きもの。つまり、世情の固定観念を当てはめにくい物語にしたてあげたのではないかと思います。自分の「性」を固定するのは大切ではあっても、重い「黄金の鎖」にしてはならないという観念が動いて、そこからの解放を小説空間に託したのかと思います。

作者の現実生活歴は、一般にも知られています。離婚とか、子供と会えない取り決めとか、心の中ではどれほどの悩みと決断の大波に襲われたことか。

しかし、彼女は、日本の平安時代の文学を基に、彼女の小説上の「自由」を描き直しています。不自由が通例の世に、「自由」の表現者だと思います。

『トモスイ』を読んで

◆【 T 】

作者がアジア 10 カ国を旅し、それぞれの国を舞台にして書かれた 10 編の短編集。作品の中の風土や風習にアジアを感じることができる。時空を超えた不思議な話が多かった。

「トモスイ」 ―タイ―

ユヒラさんという男性と釣りに出かける。釣ったトモスイは魚でも海藻でもなくて、赤ん坊ほどの大きさの、貝の剥き身みたいなものだった。釣り船の中の様子や二人でトモスイを吸い合う様子はエロティックでもあり、性を超越しているイメージでもあり不思議な感覚の話だった。

「どしゃぶり麻玲」 ―マレーシア―

きっと、お父さんと一緒に麻玲も自動車事故で亡くなってしまったんだろうな。でも、それを認めることができず、夢の中で生き続けている女性。夫が亡くなったことは認識できるが娘が亡くなったことは認識できない。また、生き残った息子の成長は理解できるが、12 才で亡くなって24年経った娘は 17 才～18 才で表れる。17 才～18 才の娘の生き生きと輝く姿を見たかったんだろう。母親の悲しみや愛情が感じられる一篇でした。

「投」 ―上海―

《目の前の窓に老人が立っている。こっちを向いているのも、いつものこと老人の部屋の明かりは薄暗く、おまけに逆光なので、顔は今夜も見えない。》

窓を開けるたびに、こっちを向いてる人がいるなんて、怖いし気持ち悪いし不安にもなる。窓から投げたのは何だろう。金魚か老人自身か、それとも老人を不安にさせている何かか。怖くて不思議な感じがする話。

「ジャスミンホテル」 ―ベトナム―

大学紛争のとき、たくさんの若者が変革を求めて突き進んだ。医者を目指していた影山の人生は、この時別の方向に向かっていった。ベトナム戦争反対運動も大学紛争の一因であったため、夏子がベトナムにいった時に影山のことや当時の状況を思い出したのだろう。影山は、思想的に夏子の生き方を認めることができなくて別れた。しがし、思想に従った行動ではあるが、感情はついていっていないのではないだろうか？影山も夏子も感情がいつまでも心の底に澱のように沈殿しているようだ。

◆【 N2 】

全十編のうち、最難関はトモスイでした。5w1h に慣れている私にとって難しかったです。ずんずんと読みとすすめてふわふわと漂っているうちにエンドとなってしまいました。これって何？月明かりの中で、男でいるのも嫌、女になるのもいやだと言うユヒラさんとガラス底の船で漁に出る。女が足を放り出している形状の岬を回り、ユヒラさんが釣り上げた、貝のむき身のような赤ん坊ほどの大きさのトモスイを、二人で味わいながらむしゃぶり尽くす。トモスイを間にして二人はひとつの身体になり、繋がってどの部分が男でどの部分が女かすっかりわからなくなった。云々。これはもう感想文などと文字には出来ない。固定観念で考えず、ただただ読みながらこの情景に漂っているだけで良いのかなと思う作品でした。

◆【 KH 】

『トモスイ』より『天の穴』感想文

新聞の人生相談を見るとはなしに見ていたら、『自分に張ったレッテルを剥がして見たら』という回答者の言葉にはっとした。そうか！レッテルは他人に貼るものと思い込んでいたが、自分にレッテルをはる、つまり“私”に対する決めつけを、無意識にやっているかもと改めて思った。自己認識は相対的であるべき？というか、“確たる自己”というものが、何だかあやふやな私は、自分はこうだと決めつけ身動きが取れなくなることは、あまりないのだけれど。むしろ、あっちこっち優柔不断で、身動きが取れなくなることは、しょっちゅうある。

自己の中の“わたし”は決めつけんでや！という声をあげられない。『決めつけないで』という子どもさんの抗議の言葉を読書会で紹介された方がいらしたが、無意識にやっている決めつけ。これは気をつけねばならない。

物事は、相対的視点でみたほうが自由度が上がる気がする。ならば自己のことも相対的というか一歩引いてみると、よく見えてくるのかもしれない。

そんなこんなで、『トモスイ』の感想文を書かねばならない、、、相対的視点で己を見つめる。ハイライトのシーン【天へと通じる穴、というかトンネルの一番下から、宙（そら）を見上げている2人】台風の目は、天空からの視点だと、よく天気予報で見るそれだが、この小説では、地上から宙を見上げるというもう一つの視点がある。

台風、台風の目と言われれば、実感と体感を伴う記憶がある。私は、昔は台風銀座と呼ばれていた鹿児島生まれ。もっとも、今や台風は神出鬼没。東北だろうが、北海道だろうが台風の豪雨と強風に脅かされる異常気象だが。幼い頃に得た、台風への生々しい恐怖と高揚感は、忘れられない。大人になってから、土佐の高知、桂浜で台風間近の荒波を見たときにも、同じ感情を持った。上記の高揚感については、土佐生まれの友人も同じことを言っていたっけ。

台風がやってくる前の、湿気をたっぷり含んだ風、雲の動き、風は強弱の波を繰り返しながら次第に、暴風となる。大きな雲の塊が渦を巻いて近づいてくる予感。ビュービューという風の唸り声、雨戸のガタガタ揺れる音。首をすくめてやり過ごすしかない恐ろしさと、なぜか

ワクワク感と、高揚感（不謹慎だけれど、大きい台風であればあるほど、人智を超えたものへの畏怖を、ワクワク感と記憶しているのかもしれない）そして、台風一過の青空の下、どこから飛んできたのかと思うような大きなトタン板や吹きちぎられた枝や木の幹、地面に張り付く木の葉などなど、を長靴を履いて、まるで宝探しをするように、近所を探検して回った子ども時代を思い出した。そして、読書会でも話したが、台風の目。台風は、幼い私にとっては、巨大なしかも、静かなる眼を持つ生き物であったのだ。あんなに騒がしく音を立てて近づいてきた台風が、嘘のようにピタリと吹き降りをやめて静まり返る。これが恐ろしくなくて何だろう。見つかりませんようにと首をすくめて、でも、いまがチャンスと宿題を片付けていた、ろうそくが揺れる一夜の光景。幼なかった私にとっては不気味な眼だった。

ここで描かれている台風は、自然現象としての台風なのだから、私の思い出話はこれくらいでおしまい。

アジアが舞台のお話が続く中、なぜだかこの天の穴の舞台は福岡（日本）

土砂降りの雨の中、車を運転している私の前に、突然水の塊がドスンと落ちてくる。物語は、雨というよりは滝壺に放り込まれた車の上に滝の水が落ちてきたような衝撃から始まる。

ドスンと落ちてきた水とともに登場する不思議な少年。彼は、台風の目を探しに行くという。それは、台風の渦巻き雲の中心にあいた巨大なトンネル（天と地をつなぐトンネル）

さらに、そのトンネルの上から、台風の目の穴から何かが落ちてくる。それは、死者だという。のちに、少年は穴から落ちたときに頭が 8 つに裂けた、しかしあなたの頭はもっと小さく粉々なったと、、、台風の竜巻が車をふわりと持ち上げて、雲の上に運んで、ドスンと落としたのだと力説した。目の壁は、ものすごい上昇気流だが、目の中心は逆に上から下に下降すると。これが少年の言い分である。

とても辻褄の合う、台風の日の夕方の事故の光景。

登場人物が、なくなった後の刹那の話なのか。その後、長い年月に思える時間を経て、天の穴から、地上に落ちてきた、豊子と少年。銀河鉄道の夜のジョバンニとカンパネルラのように、生と死をつなぐトンネルを旅して。二人ともに死んでいるなら、銀河鉄道とも違う。。天空と地（海）をつなぐトンネルを瞬間に移動した物語と読めなくもない。豊子は新しい自分が空の穴から降ってきたような気がした。 P64

私 やっぱいきかえったのかもね、と。時間も空間も超える物語。

「またね。」と豊子が言った。彼は豊子を斜めに見上げ、黙って車を降りた。振り向かずに雨の中を歩いて行く。

この後の、数行なくてもいいような。

豊子は少年が雨に滲むように消えたあたりを見続けた。どこに帰って行ったかは、見定めることが出来ない。

この2行だけて終わる方が、条理を超えた物語らしくならないか。

と、思って見たが、やはり66ページの4行 またね、と言ったものの～切なくなるのではないだろうか。には、二人が立ち会った台風の夜の匂いと指先の感触という、この小説の感覚的な大切な部分をぎゅっとまとめてあるのだから、なくしてはいけないなと思い返した。

「蛇足」 少年が帰って行く先には、青い十字架のネオンを載せた病院の四角い建物が、

ぼんやりと立っていた。とあるが青い十字架の意味することは？？架空の異次元の世界の話ということ？ネット検索では、これ！という答えを得られなかった。どなたかご存知なら教えていただきたいです。

◆【 望月悦子 】

今回の課題本「トモスイ」の作者高樹のぶ子は、究極の自由を求めた究極の生き方をする人のようであるが、小説業平では、「雅」を追求し、今回のトモスイでは「生」を追求しているのだろうか。アジア 10 か国を訪問して完成したこれら短編は重たい話ばかりだが、一番面白かったのは「唐辛子姉妹」である。著者が擬人化で落語のような構成に仕上げていることに驚いた。あとがきでは「韓国の『恨とは何か』というテーマと格闘したあと、その重さに耐えきれずにちょっと遊んだ」とあるが、なるほどと思いながら最後の結末はまるで落語の「おち」のようにも思えた。韓国は「恨の文化」と言われているが、この短編から作者のテーマである「恨」について調べてみることにした。

一説によると、朝鮮民族にとっての「恨」は、単なる恨みや辛みだけでなく、無念さや悲哀や無常観、（虐げる側である優越者に対する）憧れや妬み、悲惨な境遇からの解放願望など、様々な感情を表すものであり、この文化は「恨の文化」と呼ばれると。また、元韓国大統領の金大中の著書「金大中哲學興對話集―建設和平興民生」の中に「私たちの民族は憂患と苦難の民族であり、『恨』は挫折を味わった民族の希望、『恨』は挫折を味わった民族の夢を実現するための準備なのだと思います。確かに私たちは、歴史の中で『恨』と共に生きてきたことは事実です。しかし、常に自分自身を慰め、励まし、その結果、未来に向かって生きていくことができた。私たちの民族は、畑の雑草のように、踏みつけられ,そして蘇る。韓国人は 2000 年間、文化的アイデンティティを捨てなかった。韓国人は、大きな苦難に耐え、あらゆる方法で忍耐してきました」と記述されている。

「まあ聞いてください。その豊臣（秀吉）らが持ち込んだ唐辛子ではありますが、この国で進化して旨みを増したのは、なんと申しましてもこの土地のお陰なのですよ（p88）」「学ぶな、考えるな、ただ自らを感じよ（p90）」等アイデンティティの箴言として日常生活に浸透しているのだろうか。著者の「恨とは何か」を遊び心で仕上げたこの短編には、もっと多様な思いがあるように思えた。

次に「はて？」と考えさせられたのが「ジャスミンホテル」 この短編では、作者の意図は何だったのだろうかと考えた。主人公夏子に宛てた影山の手紙の文面「あなたが考える医者になんか、僕はなりませんよ。望み通り白い光に包まれて、貴女は恵まれた人生を生きて行ってください。アルコールと煙草と、娼婦の酸っぱい汗と血の匂いが交じり合うジャスミンホテルより、無邪気に自己肯定を続ける貴女にさようなら。（p137）」医学部の学生だった影山は、1972 年サイゴンが陥落する 3 年前の夏、新聞記者の兄とサイゴンに行っている。このサイゴンでの体験が彼の人生を狂わせたのか。映画「地獄の黙示録」（私は気分が悪くなり途中で視るのを止めた作品）にも描かれている戦争での、狂気・虐殺・悲惨・特殊部隊・人道的な心優しさからの山のように積み重なった子どもたちの腕等々から、彼の求めている理想と現実

のギャップをジャスミンホテルから見たバンランの花の美しさによって虚しさを感じ、絶望感を抱き帰国したのだろうか。人生を狂わせるのは戦争をしている当事者だけでなく、戦闘場面を実際に見聞きし間接的にかかわった者までも狂わせてしまう。
「影山の人生は、曲線を描かずどこかでポキリ折れたのだ。徐々に力が加わっていき、あるとき耐えきれず音立てて折れた。(P136)とある。
ベトナム戦争後のサイゴンの町は、南洋の花や樹木の美しさ、ノンと呼ばれる三角笠、天秤棒をかついだ女など古き良き時代の生活を取り戻しながら、流行を取り入れ新しい生活が始まっている。夏子は、それらの状況を見て最後「大声でサイゴン万歳！」と叫んでいる。あとがきでは「愚直で重い情念」でこの作品を書き上げたとのことであるが、「夏子の体に怒りが沸き上がり、笑いが噴き出した。ベトナム戦争なんて、誰かのデッチ上げだったんじゃないの？(P148)」この文言こそ作者の主張ではないかと思われた。現在のあちこちの戦争もこの文言通りであると痛感する。戦争なんて馬鹿馬鹿しい。何の益があるというのか。言語を絶する。戦争に対する苦々しさを感じた作品だったとまとめることができた。

◆【 MM 】

表題の「トモスイ」を読んだ時、目の前に霧がかかったような感覚になった。ぼんやりとして、空をつかむような。少し気味が悪いけどその先が知りたいと思う不思議な感じ。先を知りたいと思っているところでお話は終わる…短編の良さ、ではなく、もっと続きが読みたいのに…と歯がゆい。高樹のぶ子が書く壮大な物語を2月の読書会で読んでいたので今月のぷつりと切れた物語に肩透かしをくらった。これは読書会に出てみんなの感想をぜひ聞かなければ！と待ち遠しかった。

私の期待通り、読書会ではみんなの様々な感じ方に触れることができ、気づかなかった表現、作者の魅力も新たに感じることができた。10篇の作品の中で、気に入ったタイトルにも参加者の個性があらわれ、推しポイントを聞いていて本当に楽しかった。私が理解するのに苦しんだ作品をお気に入りにあげた人の感想を聞いて、あぁ、そこに感動するのか、気づかなかった！とわくわくした。

『トモスイ』が生まれた背景をさらに知りたくて、月当番が薦めていた『アジアに浸る』(高樹のぶ子／著　文芸春秋　2011年)を図書館で借りて読んだ。「トモスイ」はタイ訪問から生まれた物語。タイは4つの国と国境を接しており、地方地方で文化も習慣も違っている。様々な民族が入り混じって暮らしている。仏教国ではあるけれども、強制されているわけではなくイスラム教やキリスト教を信仰する人も多い。性に対しても寛容な国で、男女の二つだけではない様々な性についてもあるがままに受け入れている。持って生まれた性とは違う性で生きていく、そのために性転換手術を行うのもあり、体はそのままで心は違う性で生きていくのもあり。そういう人が村の要職についたり町のあらゆることの相談役についたりもする。両方の感性を理解できるというのは貴重な存在である。『アジアに浸る』の中の「タイに浸る」を読んで、著者と同じく「性とは？」と考えるほどわからなくなってきた。男と女、どちらかに所属する必要はないのでは？なんでもあり　をあるがままに受け入れることができるおおらかさ、懐の

深さから生まれた物語が「トモスイ」、タイの世界観をあの短さで表現できる作者の力量に恐れ入った。

読書会後、私が楽しみにしていたのは最も理解に苦しんだ「唐辛子姉妹」の再読だ。初めて読んだ時は字面を追うのみで通り過ぎてしまった。どう思ったか、というより、意味がわからなかった。あとがきには韓国の「恨（ハン）とは何か」というテーマと格闘したあとその重さに耐えきれずちょっと遊んだ、と短くまとめているのみだった。唐辛子姉妹の中では「恨のDNA」、「知りすぎるは恨の元ぞ、悲しみの根源なるぞ」、「恨とはこのように、向上心を生むものなのだ」という表現で恨を取り上げていた。韓国における「恨」について私はよく知らず、日本語の恨みとはもちろん違うようだぞ、と感じ『アジアに浸る』の中の「韓国に浸る」にヒントを求めた。

著者は韓国の女性からみた「恨」に焦点をあてて書いていた。儒教の男性優位の考えにおける女性の立場、男性優位の家族観の中における女性の役割、その抗えない抑圧に対する反発、叶えられなかった願望が生み出す情念、前の世代への哀れみと感謝と、しかしそれを否定しないではいられない自我、愛情から生まれるやるせない反発と、揺れ動く裡なる懊悩…様々な言葉で恨を書いたが、容易に表現できるものではない、と書いている。この章を読んで、これは大変なことに足をふみ入れたぞ…と感じてしまった。韓国を知るうえで恨の文化について知ることは避けて通れないようだ。しかしこの大きなテーマについて2冊の本から結論づけることは難しい。これから先もほかの資料にあたることが必要だ。終わりはすぐには見えないけれど、このようにして新たなテーマに出会えることが読書会に参加し続ける理由になっています。